

2023年10月29日  
九州連合長老会宗教改革記念講壇交換  
別府不老町教会主日礼拝  
牧師 乾元美（宮崎中部教会）

創世記 15：4～6

ローマの信徒への手紙 3：21～26

「信仰によってのみ」

【説教】「信仰によってのみ」

<宗教改革記念日>

今日は、10月31日の宗教改革記念日を覚えてなされる、九州連合長老会の講壇交換です。

今日の聖書箇所、ローマの信徒への手紙 3：21～26 は、講壇交換が行われるすべての教会の説教で、共通して語られる御言葉です。

この箇所が選ばれたのは、特にプロテスタント教会の最も大切な信仰の一つ、「信仰義認」、「信仰によってのみ義とされる」ということが、はっきり示されている御言葉だからです。

宗教改革者であるマルティン・ルターは、この御言葉から、本当に聖書が語っている信仰の恵みを、再発見したと言われていています。いわば、この聖書箇所は、宗教改革のきっかけを造り出した御言葉なのです。

今日は、別府不老町教会の皆さんと共に、宗教改革以来、プロテスタント教会として、わたしたちが受け継いでいる信仰の恵みを、改めて聖書の御言葉から聞くことができますことを、感謝いたします。

また今日は、離れた九州の各地で、同じ一つの御言葉を聞いているということを知り、改めて、わたしたちが、共に、同じ一つの信仰に立っていること。共に、同じ一つの福音をいただき、共に、同じお一人のイエスさまの救いに与り、共に、同じ一つの体として歩んでいることの恵みを、確かにされたいと願います。

<善い行い?? ?>

さて、「信仰義認」。「信仰によってのみ義とされる」。この教理は、宗教改革において、プロテスタント教会が主張した最も大切なことの一つであり、要（かなめ）となることです。

「信仰によってのみ義とされる」。義というのは、今日のローマの信徒への手紙の言葉では、「神の義」と呼ばれています。神の義。神の正しさ。これはつまり、わたしたちが、神さまの御前で、神さまに正しいと認められる、ということです。

それは、わたしたちが、神さまを愛し、隣人を自分のように愛する者であるということ。また、神さまの御心に従って、神さまとの正しい関係を築いている、ということです。

しかし、わたしたちは皆、罪に捕らわれてしまっており、神さまの御心に背いています。神さまに従って歩むのではなく、自分の心の思いに従って歩んでいます。神さまが、わたしたちの人生の主人であるのに、わたしたちは自分を人生の主人にしようとしています。

「罪」というのは、聖書においては「的外れ」という意味の言葉です。つまり、神さまに造られたわたしたちは、本来は神さまの方を向いて、神さまと共に生きる者として造られました。神さまの方を向き、神さまの愛を見つめ、わたしたちもまた、神さまを愛する。そういう目的で、わたしたちは造られました。そして、そのように神さまと共に生きるところにこそ、わたしたちの本当の喜びと、平安があるのです。

それなのに、わたしたちが、向くべき方向を向かず、神さまという的外を外して、あらぬ方向を向いていること。そうして、行くべき道を外していること。それが、罪なのです。

わたしたちの命の源、そして生きる目的は、わたしたちをお造りになった神さまにあります。それなのに、的外を外してしまうなら、わたしたちは、命の源からどんどん離れ、生きる目的を見失い、悲惨に陥り、滅びへと向かって行ってしまいます。

そんな歩みをしているわたしたちは、深刻な罪人であり、とてもではありませんが、神さまの前で、正しい者とは言えない。神さまに、義と認められるものではないのです。

宗教改革が起こる前。当時の教会は、そのような罪人のわたしたちが、神さまに義と認められるためには、「信仰」と、「善い行い」が必要である。神さまに正しい者とされ、命を得るためには、イエスさまの救いを信じる信仰と合わせて、自分でちゃんと神さまの方を向いて、神さまに喜ばれる行いをして、救われるにふさわしい徳を積んでいくことが必要だ、と教えていました。

しかし、当時、修道士であったマルティン・ルターは、自分の罪があまりにも深刻過ぎるので。どんなに努力しても、どんなに熱心に善い業を行なっても、そんな自分の業は、神さまが望んでおられる正しさに、全く到達することができない。自分を救うために、自分の善い業なんかは、何の足しにもならない。そう感じて、深く絶望し、思い悩んでいたのです。

どうやっても、何をしても、自分を最後に待ち構えているのは、神さまの怒りであり、裁きであり、滅びでしかない。ルターは、そんな恐怖から、逃れることができませんでした。

自分に根付いている、どうしようもない罪深さ。どうしようもない弱さ。どうやっても、神さまに完全に従うことが出来ない、自己中心的な思い。神さまを愛せない、隣人を自分のように愛することができない、そんな自分の貧しさ。

そのような罪の現実を、わたしたちも、確かに知っているのではないのでしょうか。

もし罪人のわたしが、救われるために、神さまに正しいと認められるために、自分の善い業も必要だと言われるなら。わたしたちは、神さまが求めておられることを、何一つ満たすことが出来ない、自分の罪深い現実に気付かされ、絶望してしまうのではないのでしょうか。

…わたしは、神さまを愛し、神さまを生活の、人生の、すべての中心として歩んでいるのでしょうか。本当に、隣人を愛しているのでしょうか。敵がいたとき、その人を愛し、赦したのでしょうか。心に、妬みや憎しみを持たずに生きてきたのでしょうか。

わたしたちが、神さまの御心に適う者、正しい者となることは、何と不可能なことでしょうか。わたしたちは、決して神の義など、得ることは出来ないのではないのでしょうか。

<ただ恵みによって、ただ信仰によって>

しかし、本当は、聖書がずっと教えていたことは、わたしたちが救われるために、信仰と、善い行いが必要だ、などということではありませんでした。

今日の、ローマの信徒への手紙 3：21～24 をもう一度読んでみます。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義が、示された。神の恵みにより、無償で、こちらからは何を差し出すこともなく、義とされる。

聖書にはそうあります。ルターは、思い悩みながら、聖書の御言葉と真剣に向き合い、格闘しました。その中でルターは、本来、聖書が語っているこの御言葉の意味を、本当の救いを、再発見したのです。

聖書には、自分の善い業が、自分を救うために必要だ、などとは書かれていない。救いは、いかなるわたしの善い業にもよらない。功績や、徳を積むことにもよらない。

救いは、神の義は、神さまが無償で、見返りなく、ただ恵みによって与えてくださる。イエスさまを信じるすべての者に、神の義は与えられる。聖書はそう語っていたのです。

何もできないわたしのために、罪人のわたしのために、神さまが、わたしたちを救って下さいます。救いは、わたしたちが、自分で手に入れるものではありません。救いは、神さまから、外から来るのです。そしてそれを、わたしたちは、イエスさまを信じる信仰によって、ただ受け取るだけなのです。

神さまは、罪人のわたしたちを、御前に正しい者として立たせてくださるために、ご自分の御子イエスさまを、救い主として与えて下さいました。

そして、イエスさまは、わたしたちが自分では担い切れない、解決することのできない、どうしようもない罪を、すべて引き受け、わたしたちの代わりに審きを受け、十字架に架かって死んでくださったのです。イエスさまは、わたしたちの罪を解決するために、贖うために、ご自分の命を差し出してくださったのです。

わたしたちは、このイエスさまの十字架によってこそ、罪人でありながら、その罪をイエスさまに覆われて、贖われて、神さまの御前に、正しい者として立つことが赦される。神の義を、いただくことができるのです。

わたしたちはただ、イエスさまが、わたしたちのために救いの御業を為し遂げてくださったことを信じ、差し出された救いを、神の義を、感謝をもって、受け取るだけなのです。

### <喜ばしい交換>

そうしてわたしたちが、イエスさまを信じ、神さまの恵みを受け入れるとき。教会は、その見える「しるし」として、洗礼を授けます。

洗礼においては、聖霊なる神さまが、十字架と復活の救いの御業を成し遂げられたイエスさまと、その御業を信じた罪人のわたしたちを、一つに結び合わせてくださいます。

そうして、わたしのすべての罪が、イエスさまのものになる。そして、罪の贖いを成し遂げられたイエスさまの義が、イエスさまの正しさが、わたしのものとされるのです。

こうして、わたしたちは、イエスさまによって、罪を赦され、正しい者と認められます。罪人なのに、義なる人とされます。朽ちる者だったのに、復活する者とされます。滅びる者だったのに、神さまと共に、永遠の命を生きる者とされるのです。

この信仰の出来事を、ルターはこう表現しました。「信仰は、新婦が新郎とひとつにされるように、わたしたちの魂を、キリストとひとつにする」。そして、両者が所有しているもの、幸も不幸もあらゆるものが共有となる。キリストが所有なさるものはわたしたち、信仰ある魂のものとなり、魂が所有するものは、キリストのものとなる、と語りました。

そして、ルターはこれを、「喜ばしい交換」と呼んだのです。喜ばしい交換。

確かに、わたしたちにとっては、キリストが所有なさるものをいただけるのですから、これ以上「喜ばしい」ことはありません。わたしたちは、良いものを受け取るばかりです。

しかし、イエスさまにとってはどうなのでしょう。わたしたちは、イエスさまから良いものをいただく代わりに、いったい何をこの方に差し出したのでしょうか。イエスさまは、わたしたちの何を、ご自分のものとされたのでしょうか。

わたしたちは普通、誰かと何かを交換するならば、同じか、それ以上の価値があるものを交換します。しかし、わたしたちは、価値あるものを何も持っていませんでした。わたしたちの方には、差し出せるものが何もなかった。恵みをいただくために、救いをいただくために、義をいただくために、交換できるものは、何一つ持っていませんでした。たとえ、自分の命を差し出しても、それは、わたしたちのあまりの罪深さのゆえに、神の義をいただくには全く足りませんでした。

あまつさえ、わたしたちがイエスさまに差し出したものは、なんと、わたしたちの罪と、裁きと、呪いの死でした。わたしたちは、何かを差し出すどころか、大変な負債を抱えており、相手に損をさせ、苦しめ、破滅させるようなものしか、持っていませんでした。

しかし、驚くべきことに、イエスさまは、それを喜んで交換して下さいました。

なぜなら、イエスさまを遣わして下さった父なる神さまは、わたしたちを心から愛し、お造りになったわたしたちの存在そのものが、価値があり、貴いのだと、仰ってくださる方だからです。ですから、わたしたちが、どんなに罪を犯しても、神さまは、わたしたちが神さまから離れて行くことを、背いたままでいることを、滅びていくことを、決して良しとはされませんでした。

そして、父なる神さまと、御心を一つになさる神の御子イエスさまは、わたしたちが罪から解放され、父なる神さまの御許に取り戻され、生きる者となるためなら。わたしたちのすべてを引き受け、ご自分のすべてを与えても良いと思ったださるほどに、わたしたちのことを愛してくださったのです。だから、この交換を、喜んで引き受けてくださったのです。

…イエスさまは、本来はわたしが、自分の罪のために受けるべき、裁きも、神さまの怒りも、苦しみも、痛みも、死も、滅びも、すべてをご自分のものとされました。そして、あたかもご自分が罪を犯したかのように、十字架の死を受け入れてくださったのです。

その一方で、わたしたちは。イエスさまが為し遂げてくださった、その罪の償いを。十字架の死に至るまで、神さまに完全に従い抜かれた、その正しさを。神さまの御子である、その聖さを。すべて自分のものにして良い、と言われたのです。イエスさまが、ご自分の命でわたしの罪の償いを成し遂げ、得てくださった神の義を、あなたのものとして、受け取ってよい、と言われたのです。

ローマの信徒への手紙 3：22～24 にはこうありました。「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

これが、わたしたちに与えられている救いなのです。

ですから、神さまが、イエスさまの贖いの御業を通して与えて下さる、完全な救いに、わたしたちの取るに足りない善い業を、何か他のものを、付け足す必要は全くありません。

むしろ、わたしが立派にならなければ、清い人物にならなければ、何か善いことをしなければ救われない、と思うことは、イエスさまの十字架では足りないということ。イエスさまの罪の贖いを、軽んじることに他なりません。

神の御子イエスさまは。そして、イエスさまを遣わしてくださった父なる神さまは。わたしたちが、自分の罪深さを知り、ただ神さまの恵みによって救われることを信じ、イエスさまが与えてくださる救いを、大切に受け取ることだけを、求めておられます。

そして、わたしたちが救われ、義とされ、神さまの方を向いて、神さまと共に生きる者となることこそ、神さまの喜び、イエスさまの喜びであると、言って下さるのです。

#### <信仰によってのみ>

わたしたちを救って下さるのは、義として下さるのは、ただイエスさまだけです。

そして信仰とは、その義を、信じて受け取ること。ただイエスさまだけに救いがあることを確信して、イエスさまに信頼して、罪の自分をこの方に委ね、この方から救いを受け取ることなのです。

それが、ただ信仰によって、救われるということ。ただ信仰によってのみ、義とされる、ということなのです。

神さまは、イエスさまによって「神の義」というプレゼントを、わたしたちに無償で、ただ恵みによって、差し出して下さいました。

そして、そのプレゼントは、わたしが喜んで受け取ることによって、はじめて「わたしのもの」になるのです。ここに、信仰があります。

差し出されたものに対して、それが、本当に自分を救うかどうかを疑っているなら。プレゼントを前に、手を引っ込めて、そっぽを向いているなら。それは当然、「わたしのもの」にはなりません。

だから、わたしたちは、自分で自分を救おうと、これまで得てきた、握りしめていた、色々なものを手放して、両手を空っぽにして、神さまの方を向いて、差し出されたイエスさまの救いを信じて、ただ、それを受け取るのです。

そうして、罪によってあらぬ方向を向いていたわたしたちは、救いをしっかりと受け取るために、神さまの方へ向かって、方向転換することになります。これが、悔い改めです。

悔い改めは、回る心、と書いて「回心」とも言いますが、それはまさに、的を外していたわたしたちが、罪からくると方向転換をして、神さまの方へ向き直すことなのです。

そして、イエスさまに結ばれて、罪を覆われて、正しい者として神さまの御前に立つことが赦されて、神さまと共に生きる者とされる。わたしの人生が、生ける神さまと共にあり、喜びのときも、悲しみのときも、生きるときも、死ぬときも、常にこの方の愛の御手の中にあると知る。ここにこそ、わたしたちの救いがあり、慰めがあり、希望があるのです。

そして、この恵みに立って、わたしたちはやっと、本当に、善い行いを始めていくことが出来るのです。この善い行いは、わたしを救うためにするのではなくて、わたしを救ってくださった、神さまへの感謝の応答としてなされるものです。

わたしたちは、自分が救われるためにと、脅迫的に、必死に、善い行いをするのではなくて。わたしの存在を喜んでくださり、すべての恵みを与えてくださった、神さまへの感謝のうちに、神さまを愛する思いの内に、神さまに喜ばれる業を行いたいと願っていくのです。

「信仰によってのみ、義とされる」。わたしたちは、確かに、恵みによって、信仰によって、イエスさまの義をいただき。今ここに、救われた者として集められ、神さまの御前に立っています。この礼拝には、神さまと共にある、わたしたちの喜びが、そして、それにもまして、わたしたちを愛してくださる神さまの喜びが、満ちているのです。

この喜びを、わたしたちの家族も、友人も、隣人も、地上のすべての者も、信仰を与えられて、受け取っていくことを願います。

そのためにこそ、わたしたちが、感謝に溢れて神さまを礼拝し、善い業に励み、イエスさまに救われた喜びを、神さまと共に生きる喜びを、証ししていきたいのです。

## 【お祈り】

天の父なる神さま 御名をほめたたえます。

あなたは、ただ恵みによって、わたしたちを愛して下さり、憐れんで下さり、共に生きることを望んでくださいました。そして、わたしたちに、驚くべきプレゼントを、イエスさまによる神の義を、与えて下さいました。

わたしたちは、自分の罪深さを認め、悔い改め、ただそのプレゼントを受け取ることしか出来ません。どうかわたしたちに、イエスさまの救いを、心から受け入れさせ、救いをわたしのものとさせて下さい。

そして、聖霊によって、わたしたちをイエスさまと結び合わせ、新しくしてくださり、あなたに喜ばれる歩みができますよう、導いてください。

そして、神さまと共に生きる喜びが、祝福が、地上のすべての者に与えられますように。このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン